

大学生の進路選択決定過程は変化したか

— 2015～2017年度と2001～2004年度の進路相談者調査の比較から —

安住 伸子

はじめに

カウンセリングルームに学生は様々な相談で訪れるが、中でも進路の相談は毎年一定数訪れる。進路の問題は学生全員が直面する問題であり、卒業する時の社会情勢に大きく影響を受ける領域である。しかし、進路選択決定のプロセスは社会的経済的背景だけでなく、学生の内面の成長とも大きく関わる。鶴田（2001）は、大学生活を学生生活サイクルの視点から研究し、卒業期は「将来像」と「仕事」の統合が課題となるとしている。五十嵐（2012）は、大学生のキャリア発達についての1～4年までの各学年の横断的研究から、学年によって異なる支援や配慮が求められるとしている。また「適性や能力の理解」「計画立案の自信」「情報収集の方法」「性格をよく理解」といった進路選択にかかわる具体的なことからでは、3年時に得点が優位に低下したうえで4年生が最も高い値になったとしている。これは「それまで漠然と持っていた就職活動のイメージが自分の問題として意識されるようになったとも考えられる」と五十嵐は考察しており、学生が就職活動を実際に行っているうちに進路選択に対する自己効力感が向上するという浦上（1996）の結果とも一致している。五十嵐はまた「不安はむしろ将来に向けての今現在の準備活動を促す面もある」と指摘しており、そのような不安の高い学生が積極的にカウンセリングルームに進路相談にやってくるとも考えられる。

安住（2006a, b）は、進路の相談で来た学生がどのように進路選択決定をしていくのかを調べるために、進路相談で来談した学生が面接の中でどのようなテーマを取り扱うかを調査した。来談した学年別に進路相談の中で取り扱ったテーマを調査

したところ、学生は何度も自分を振り返りながら進路の見直しを行い、それまであまり触れてこなかった親との問題にも向き合い、自分なりの意思決定をしていくというプロセスをたどっていくことが浮き彫りになった。その時からほぼ15年が経過したが、学生の就職をめぐる社会的な状況はかなり変わった。人手不足から学生の就職率は近年上がってきている（2017年97.3%、2018年98.0%）が、本学での進路相談はむしろ2011年度あたりからほぼ3桁になるなどむしろ増加している（図1）。本学の就職実績が98～100%（2017年度）であることを考慮に入れると、これは就職活動がより早期化したためとも考えられるが、学生の意識の方はどうだろうか。売り手市場と言われている割には学生の就職に対する不安はあまり軽減しているようには見受けられない。進路相談の増加が不安によるものだとすれば、近年の学生の進路選択決定過程は変化したのだろうか。それとも早期化しただけなのだろうか。変化したとすればどのような変化であろうか。

そこで、2015～2017年度に来談した学生のうち、進路の相談で来談した学生の相談の中でどのようなテーマが扱われたかについて調査を行い、2006年度に行った調査の結果と比較してみることにした。2006年度に行った調査では、学生が扱った

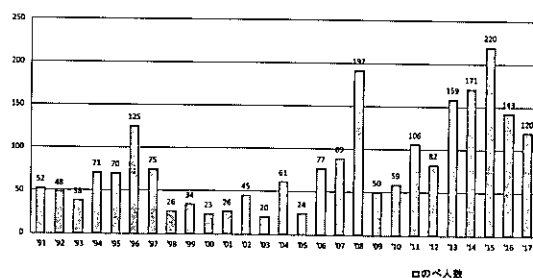


図1 1991～2017年度の進路相談者数

テーマとして、森田(1999)の分類を参考にし、a.進路の見直し、b.自分を振り返る、c.適性、d.気持ちの整理、e.親との問題、f.情報収集、g.決意・決断、h.確認・報告の8つに分けた。最近では発達障害の傾向や特性を持った学生が、自分自身の理解を深めるために職業興味検査だけでなく、発達検査を希望したり、本人の自己理解を促すためにカウンセラーから提案したりする事例も増えてきているので、今回は、c.の適性に「発達検査など」という内容も含めた。別のテーマとして増やすことも検討したが、そこまで明確に自分の特性について意識しておらず発達検査に至らなかったケースも多々あると思われ、c.の自分の職業適性の中を含む方が実情に沿っていると思われた。また、2016年に発達障害者支援法が制定されてから、発達障害のある学生に対しては学内においては合理的配慮の提供がほぼ義務付けられ、卒業後に関しては就労支援機関につなぐことが推奨されるようになった。こういった流れをうけて、我々も該当する学生のうち希望する学生には、卒業後の就労に向けてアセスメントや相談面接を経て、就労支援機関につないだり、フォローアップ面接をしたりしている。こうした背景を持つ学生には卒業や中退などで大学を離れたあとにどのような対応をしたかについてもあわせて調査した。なお2006年では安住が担当した進路相談の

みを対象に調査したが、今回はカウンセリングルームに勤務する非常勤カウンセラーにも協力を依頼し、それぞれが2015～2017年度に担当した進路相談についてアンケートを行う形で調査した。

方法

筆者も含めたカウンセリングルームに勤務するカウンセラー6人に、2015～2017年度に進路の相談で来談した学生をピックアップしてもらい、それぞれの学生について①来談した学年、②それぞれの学年で取り扱ったテーマ、③面接を終結あるいは中断したあとの転帰(卒業した・卒業し就職した・卒業したが就職しなかった・卒業しなかったが就職した・卒業しなかった・在籍中・不明)と④就職が決まらず大学を離れた後の対応(就労支援機関につないだ・フォローアップ面接をした・特に何もしなかった)について調べてみた。非常勤カウンセラーのうち2名は該当する期間に進路の相談で来談した学生を担当していなかったため除外した。したがって調査を依頼したカウンセラーは4名であった。

結果

1. 進路相談で来談した学生の実人数

進路相談で来談した学生は1年次来談者が12名、2年次来談者は3名、3年次来談者は4名、

表1 2015～2017年度に進路相談で来談した学生の来談時の学年別実人数

来談学年	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生以上(修士課程含む)	合計
進路相談の来談学年別実人数	12	3	4	10	1	30

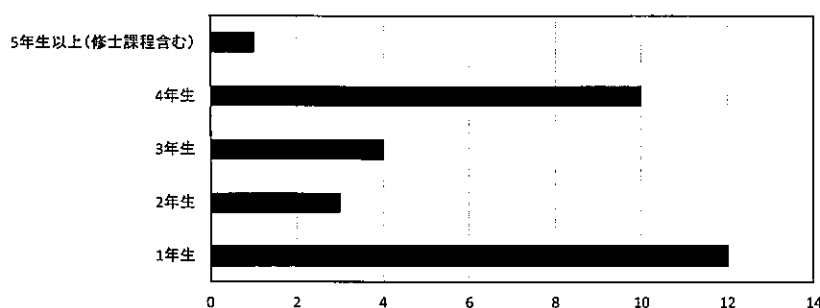


図2 進路相談の来談学年別実人数

4年次来談者は10名、修士課程を含む5年生以上では1名の合計30名であった。カウンセラーごとの担当者数はカウンセラーAが15名、Bが7名、Cが6名、Dが2名であった(表1・図2)。

2. 来談学年ごとのテーマ(複数回答)

この30名の学生について相談面接のなかで扱われたテーマを複数回答で尋ねたところ結果は表2のとおりであった。最も頻出したのは「気持ちの整理」(38)で、「進路の見直し」(27)、「自分を振り返る」(23)、「親との問題」(22)、「適性・発達など」(22)が続いた。最も少なかった「その他」

(1)の具体的な内容は「奨学金について」であった。

これを学年ごとに表したものが図3である。すべてのテーマで最も多いのは4年生時で、3年生時、1年生時と続いている。「適性・発達など」のテーマは4年生時が最も多いが次に多いのは2年生時・3年生時と5年以上でほぼ同数であった。「気持ちの整理」は4年生時、3年生時、1年生時の順で多く、「進路の見直し」は4年生時、1年生時、3年生時の順に多かった。「親との問題」は4年生時に突出して多い。「情報収集」は3年生時に降に扱われ、「決意・決断」「確認・報告」はど

表2 進路相談の中で取り扱ったテーマ(学年別・複数回答)

	気持ちの整理	進路の見直し	自分を振り返る	親との問題	適性・発達など	決意・決断	確認・報告	情報収集	その他	合計
1年生時	6	7	5	4	3	1	1	0	1	28
2年生時	5	3	2	3	4	1	2	0	0	20
3年生時	8	6	3	4	4	2	3	2	0	32
4年生時	15	8	9	9	7	6	5	5	0	64
5年以上	4	3	4	2	4	2	1	2	0	22
合計	38	27	23	22	22	12	12	9	1	166

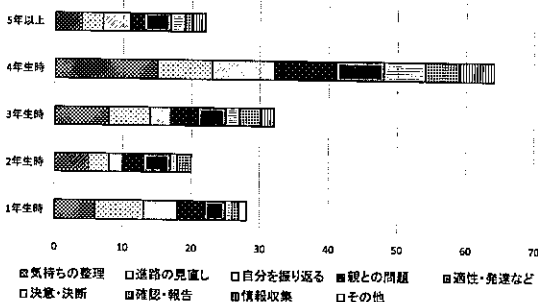


図3 進路相談の中で取り扱ったテーマ(学年別・複数回答)

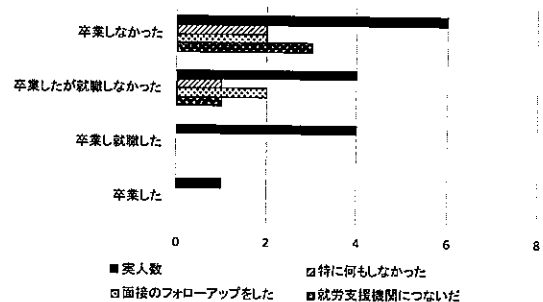


図4 進路相談で来談した学生の転帰と対応

表3 進路相談で来談した学生が面接を終結あるいは中断した時の転帰および大学を離れてからの対応

転帰	卒業した	卒業し就職した	卒業したが就職しなかった	卒業しなかった	卒業しなかったが就職した	在籍中	不明	合計
実人数	1	4	4	6	0	13	2	30
就労支援機関につないだ	0	0	1	3	0	0	0	4
面接のフォローアップをした	0	0	2	2	0	0	0	4
特になし	0	0	1	2	0	0	0	3

の学年でも扱われているが4年生時が最も多かった。

3. 面接終了時あるいは中断時の転帰および大学を離れたあとの対応

進路相談の学生が面接を終了あるいは中断した時の転帰は、「在籍中」が最も多く(13名)、「卒業しなかった」が6名、「卒業したが就職しなかった(できなかった)」が4名、「卒業し就職した」が4名、「卒業した」が1名、「不明」が2名で「卒業しなかったが就職した」学生はいなかった。

また大学を離れたあとの対応として「卒業しなかった」学生に対して「就労支援機関につないだ」が3名、「面接のフォローアップをした」が2名、「特に何もしなかった」が2名であった。「卒業したが就職しなかった」学生に対しては「就労支援機関につないだ」が1名、「面接のフォローアップをした」が2名、「特に何もしなかった」が1名であった(表4・図4)。

考察

各テーマの学年別出現頻度について

進路の相談が1年生と4年生に多かったが、1年生は「このままこの大学に定着するかどうか」という適応の問題であるのに対して4年生の進路の相談は「就活がうまくいかない」「卒業後の進路をどうするか」といったテーマであることが多い

ので、質的に全く同じではないかもしれないが、いずれも「進路の見直し」が多かった。「気持ちの整理」が1年生時以外で最も多く、ピークは4年生時であった。「親との問題」はどの学年にも表れており、ずっと底流していると思われるがピークは4年生時であった。2年生時に「適性・発達」のテーマが2番目に多くなるが、ピークは4年生時であった。「決意・決断」「確認・報告」もどの学年でも扱われていたが、ピークは4年生時であった。「情報収集」は1, 2年生時には扱われていなかった。(図5)

2001～2004年度の調査結果との比較

2015～2017年度の調査結果(A)を2001～2004年度の結果(B)と比較してみたものが表4と表5および図6と図7である。Bの結果は4年生までしか対象にしていなかったため、比較しやすいようにAの結果も4年生までをグラフ化した。

両者を比較して明らかに違うのは、Bで3年生時にピークにきていた「自分を振り返る」「適性」「進路の見直し」「情報収集」がいずれもAでは4年生時にピークを迎えていることである。またAではすべてのテーマにおいて4年生時がピークだった。Aでは、「気持ちの整理」は1年生時以外のどの学年でも最も多く、1年生時は「進路の見直し」が最も多かった。「適性・発達」は2年生時以降ずっと上位5位以内に入っているが、

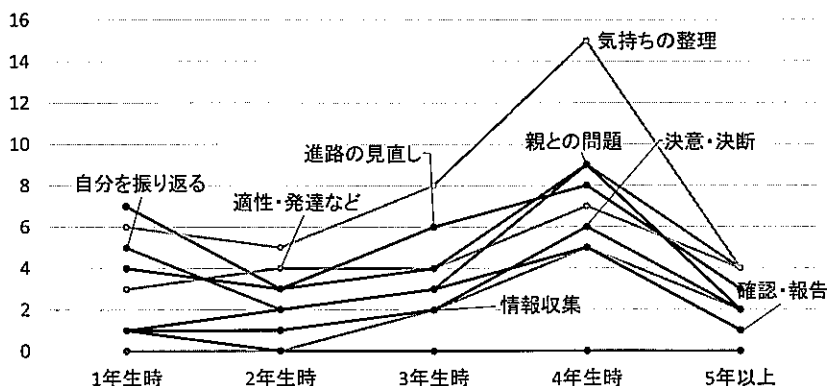


図5 2015～2017年度の進路相談の中で取り扱うテーマの学年別推移(複数回答)

表4 2015～2017年度に進路相談の中で取り扱ったテーマの学年別推移(A)

	進路の見直し	自分を振り返る	適性・発達など	気持ちの整理	親との問題	情報収集	決意・決断	確認・報告	その他	合計
1年生時	7	5	3	6	4	0	1	1	1	28
2年生時	3	2	4	5	3	0	1	2	0	20
3年生時	6	3	4	8	4	2	2	3	0	32
4年生時	8	9	7	15	9	5	6	5	0	64
5年以上	3	4	4	4	2	2	2	1	0	22
合計	27	23	22	38	22	9	12	12	1	166

表5 2001～2004年度に進路相談の中で取り扱ったテーマの学年別推移(B)

	進路の見直し	自分を振り返る	適性	気持ちの整理	親との問題	情報収集	決意決断	確認・報告	合計
1年生時	4	2	0	1	4	2	0	0	13
2年生時	3	1	0	2	3	2	0	0	11
3年生時	5	12	8	4	3	3	3	0	38
4年生時	2	9	2	7	9	2	6	3	40
合計	14	24	10	14	19	9	9	3	102

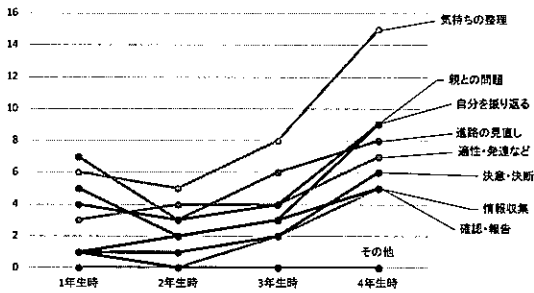


図6 2015～2017年度に進路相談の中で取り扱ったテーマの学年別推移(複数回答)A

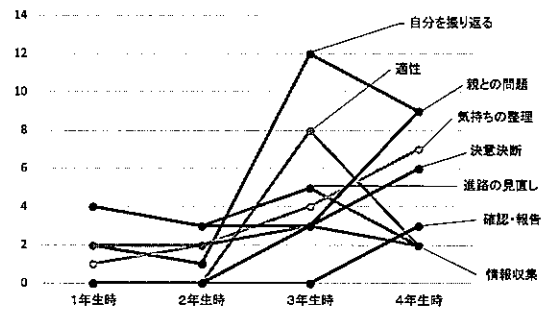


図7 2015～2017年度に進路相談の中で取り扱ったテーマの学年別推移(複数回答)B

ピークは4年生時であった。「親との問題」はずっと上位5位以内に入っているがピークは4年生時であった。「自分を振り返る」は学年が上がるにつれて増加し、4年生時には2位に浮上してきている。

上のグラフからそれぞれのテーマの出現頻度をわかりやすく図式化したものが図8と図9である。

ここから言えるのは、2001～2004年度の方が「親との問題」は早くから浮上しやすく、「気持ちの整理」よりも「自分を振り返る」作業が多く行

われていたということだろう。「適性」については3年生になって初めて浮上してきていることから、自分の適性については就職活動が始まってから考え、4年生の段階では「決意・決断」や「確認・報告」といった終盤の課題にとりかかっていた学生が多く、いわば進路選択過程は3、4年生に集中的に行われていたといえる。それに対して2015～2017年度では1年生時から4年生時まで頻繁に「進路を見直し」、「適性・発達」の問題についても2年生の段階から意識をするようになっており、どの学年でも上位5位以内に浮上してい

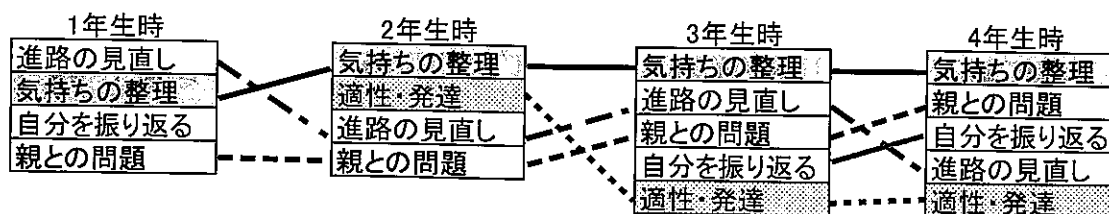


図8 2015～2017年度の進路相談の中で取り扱ったテーマの学年別推移

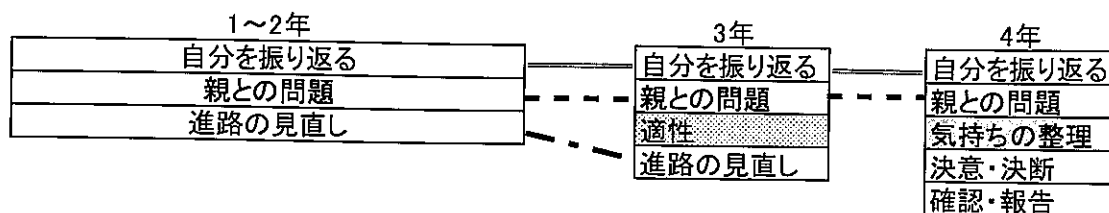


図9 2001～2004年度の進路相談の中で取り扱ったテーマの学年別推移

る。大学でも1年生の段階から就職ガイダンスを行うなど、就職を意識させる傾向が強まっていることによる影響もあるだろう。どの学年でも最も多いのは「気持ちの整理」であるというのは、目まぐるしくいろいろなテーマを考えながら早い段階から卒業後を意識し、卒業間際のぎりぎりまで気持ちの整理をしながら進路選択を考えなくてはならない学生の現状を反映しているのかもしれない。2001～2004年度では2015～2017年度よりも学生の就職状況は厳しかったと思われるが、それでも進路選択決定の作業はおおむね3～4年生時に集中しており、2015～2017年度では2年生時から自分の適性について考えるなど、進路選択決定のプロセスが早期化・遅延化したような印象がある。

大学を離れたあとの対応について

発達障害を抱えた学生への進路支援については、就労支援機関につなぐという作業をしていたのは専任カウンセラーだけであった。週1～3日の非常勤カウンセラーでは、学生との個別面接をすることだけで精一杯で、学外機関とつながるにも、余裕がないのが実情であろう。逆に、発達障害で単位取得や卒業・就職に躓いた学生が紹介されてくるとどうしても専任カウンセラーが受けが

ちになるため、そういう学生が専任に集中しやすいともいえる。吉良ら(2018)は、学生相談カウンセラーによる発達障害学生への支援の現状に関する調査において、「出口・就労支援」のうちの「在学中に就労経験を積むための支援」「卒業や中退に伴う外部支援機関への紹介」の実施率では、専任と非常勤において有意差が出ていると報告している。吉良らは「非常勤カウンセラーは専任に較べて、医師・教職員との連携や勤務校の教育制度への直接関与は難しい」とし、専任カウンセラーと非常勤カウンセラーの役割分担を考えるべきではないかという提言をしている。

2016年に障害者差別解消法が施行されてから、我々学生相談に携わるものは必然的に障害者支援の視点で学生を見ることになった。それまでであれば職業興味検査をしてフィードバックし、就職活動中のフォローアップをするにとどまっていたであろう事例も、発達障害の傾向があるかもしれないと思われる学生に対しては、特性の可能性も視野に入れてサポートするようになった。本人に自覚があり、就労支援が受けられる条件が整っていれば在学中に就職が決まらなくてもそこから就労支援機関につなぐという選択肢が出てきた一方で、学生に自覚がない場合は自己理解を促すための面接にかなり時間がかかり、結局就労支援にこ

ぎつけないまま終わることもある。一方で就労支援機関に訓練を受けるところまでこぎつけられた学生は、今のところほぼ全員が2年以内に何らかの形で就職できているが、そのような連携を行うためには学内外の資源に通じていなければ難しいし、専任のように長時間学内に在席していないと連携も難しい。卒業・中退後の進路の目安をつけるところまでを学生相談の範疇と考えるならば、外部機関との連携も、学生が選択できる手段の一つとして提供できるようになるべきなのかもしれない。

まとめ

本研究においては2001～2004年度と2015～2017年度に進路相談にきた学生、進路選択決定のプロセスを比較し、変化があるかどうかを調べた。進路選択決定のプロセスとしては前回よりも今回の方がより早い時期から自身の職業適性に関心を持ち、どの学年においても進路の見直しがなされ、気持ちの整理をつけるためにカウンセリングにやってくるという変化が見られた。しかし前回は4年生時には決意・決断、確認・報告などの就活のまとめにとりかかる学生が多かったのに対し、今回は卒業間際まで（あるいはその後も）迷い悩んでいる様子がうかがえた。これは、就職活動が一区切りついた4年生にとっても、「決定を先延ばしにしたい」とか、決まった進路についてまだ躊躇したりしている状況からより自分らしさにこだわった生き方を求めるようになるという五十嵐（2012）の考察にもあるように、4年生へのサポートも必要であることを示唆している。さらに、前回では意識していなかった発達障害のある学生への卒業・中退後を見据えた就労支援機関への紹介などのテーマが今回の調査では見受けられた。同時に発達障害学生への対応のために外部機関や学内各部署との連携を行うのは専任でないと難しいという現状も浮き彫りになった。これは吉良らの研究とも合致する。我々学生相談に携わるカウンセラーは、学生の進路選択決定の内的なプロセスを心理支援するとともに、外部就労支援

機関との連携という具体的で実地的なツールについても支援を行えるようになる必要があると考える。入学時にすでに診断や療育手帳を取得している学生の就労支援はカウンセリングルームを経由せずキャリアセンターなどが担う仕事になるかもしれないが、カウンセリングルームでは自覚のない発達障害学生の自己理解を深める作業や、本人の障害受容を支援する作業がいつそう求められてくることが予想され、これが近年の進路相談件数が増加した要因の1つとも考えられる。進路選択決定のプロセスの中に新たに含まれる作業の一つといえるだろう。したがって専任の立場で学生と関われるカウンセラーの充実と、進路選択決定支援についての研究がさらに望まれるところである。

引用・参考文献

- 安住伸子（2006a） 大学生の進路選択決定過程に関する一考察 神戸女学院大学カウンセリングルーム紀要, 11, 39-43.
- 安住伸子（2006b） 学生相談とキャリア教育～こころの成長を進路決定に生かす～ 大学と学生, 28, (通算502号) 21-28.
- 五十嵐敦（2012） 大学生のキャリア発達についての研究—1～4年までの各学年の横断データの比較から— 福島大学総合教育研究センター紀要, 12, 27-34.
- 五十嵐敦（2018） 大学生のキャリア発達と進路不安についての研究～大学3年生の進路意識と学生生活の観点からの検討～ 福島大学総合教育研究センター紀要, 24, 39-46.
- 吉良安之・高石恭子・内野悌司・菊池悌一郎・福留留美・福盛英明・松下智子・田島晶子 学生相談カウンセラーによる発達障害学生への支援の現状に関する研究（2018） 学生相談研究, 39, 1-13.
- 鶴田和美（2001） 学生のための心理相談, 培風館
- 森田美弥子（1999） 大学生の進路相談事例の分類 名古屋大学学生相談室紀要, 11, 12-24.
- 浦上昌則 1996 就職活動を通しての自己成長—女子短大生の場合—教育心理学研究, 44, 33-42.
- <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000205940.html> 厚生労働省 大学、短期大学及び高等専門学校 卒業者の4月1日現在の就職状況調査の推移